

マイノリティ女性に対する 複合差別ワークショップ

マイノリティ女性にとっての 暴力の概念の再考

反差別国際運動日本委員会（IMADR-JC） 熊本理抄



国連反人種主義・差別撤廃世界会議（ダーバン、南アフリカ）

日時：2001年8月30日午後1時～5時 於：ダーバン ホイクラブ

司会：ニマルカ・フェルナンド（IMADR/スリランカ）

パネリスト：マンディサ・モナカリ（Ilitha Labanthu「人々に光を」/南アフリカ・黒人女性）/ サロジャ・シバチャンドラン（女性と発展センター/スリランカ・武力紛争下の女性）/ブルナド・ファティマ（タミル・ナドゥ女性フォーラム/インド・ダリット女性）/ 坂根政代（部落解放同盟/日本・被差別部落女性）。

「ひとくくり」の落とし穴

国際社会があらゆる形態の差別をなくしていくための取り組みや民主主義を求めた闘いを繰り広げる中で、アパルトヘイトが廃止されて以降、そうした動きから常に取り残されてきた南アフリカ。歴史的レイシズムの中で闘いつづけ、目の前で起きるさまざまな変化や民主主義の闘いを目の当たりにしながらも南アフリカの黒人女性たちの貧困化はさらに進んでいく。また、黒人女性たちの中でも、こうした変化の中で作り出される機会にどのようにアクセスしていかさえ分からない地方の女性たちと都市の女性たちとの格差が広がっていく。

南アのモナカリさんは、「ここで私たちは自分に問いかけるべき疑問がある。南アで女性に対する暴力が多いのは他の国と比べてみた南アの状況ゆえなのか？あるいは、暴力が本当は蔓延しているにもかかわらず、あたかも存在しないかのように話さえない他の国や地域と比べて南アではそのことが話されるからなのか？あるいは話ができるような時代になったからなのか？」と。

「南アは女性に対する暴力が多い」と、無批判に受け止めてきた自分自身に対する批判としての彼女の問いに耳を傾け、私たちもまた「マイノリティ女性に対する暴力」とひとくくりにしてきた運動のあり方を見直していく必要がある。

スリランカで今も紛争が続く地域からきたシバチャンドランさんは、「紛争はただマジョリティであるシンハラとマイノリティであるタミルの『民族間の』紛争だとされているが、国家や軍隊という異なる政治アクターが戦っているのであり、紛争への介入の仕方も異なる。さまざまな見方や認識をもち、解決策を見出していかなければならない」と指摘した。

また、「女性に対する暴力」と言ったとき、それは身体的暴力のみならず、搾取や差別、経済的・社会的構造の不平等、文化的・政治的暴力などさまざまな側面があること、紛争下の女性に対するレイプは個人に対する罪だけではなく、社会全体に対する犯罪であること、「紛争下の女性」と言ったときにも、国内避難民、難民、孤児、高齢者女性、けがをした女性、移住労働者の女性、非婚の女性など、紛争によって女性はさまざまなカテゴリーに分化されるが、それぞれ異なる問題を抱えていること、こう

した問題を個別に見ていく必要があることを訴えた。

運動に生かせる統計を

マイノリティ女性をひとくくりにしてしまい、固定化してしまうことのひとつに統計のもつマイナス面があるだろう。たとえば、南アでは、あたかも「HIV/AIDS = 黒人女性の病気」と思わせるような統計しか出されない。何人の白人または何人の男性が HIV/AIDS に感染しているかという統計はない。

何人の黒人女性が HIV/AIDS によって命を失っているか、という統計しか出てこないのである。統計はマイノリティ女性をひとくくりせず、実態を正しく把握し、運動の戦略作りを行っていくためにも不可欠なものだが、だからこそ運動に生かせる調査方法とその公表の方法を明らかにする必要がある。

インドのダリット女性に対する暴力に関する実態調査を進めるファティマさんも、「ダリット女性が痛みや暴力に苦しんでいるが、誰もそれを具体的に思い描くことはできない。政府や他の NGO によるレポートでは、家がどれだけ焼かれたか、村がどれだけ破壊されたか、何人の男性が暴行されたか、ということのみで、何人のダリット女性が暴行されているのか、については報告されない。隠された部分、プライベートな部分とされてきたのだ」と指摘する。

IMADR - JC は、今回のワークショップで次の項目を含む提言を採択した。「各国政府ならびに地方自治体は、マイノリティ女性が受ける暴力の実態を把握するための調査を行うこと。調査結果、調査方法については広く公表し、マイノリティ当事者を含む、ジェンダーならびに人権の視点を持った専門家による分析をし、緊急に、法的措置を含む被害者のニーズに応えるための特別対策をとること。」

女性間・マイノリティグループ内の差別

高カーストの女性たちは、ダリット女性の運動にまったく関心を示さない。それどころか、ジェンダーについて議論していても、彼女たちにとってダリット女性は存在するに値せず、アウトカーストであり、アンタッチャブル（「不可触民」）であるとして差別し、排除する。女性たちの運動にはダリット女性の課題は含まれていない。女性の中でも高カーストによる抑圧のパワー、支配、それを是認する宗教に苦しんでいる。

こうした問題はダリット運動内にも見られる。ダリットの男性はカーストやアンタッチャブル廃止については声をあげるが、家に帰れば高カーストのようにふるまい、妻をアンタッチャブルとして扱い、殴り、支配する。カースト問題を議論する集会に妻を連れて行こうとはしない。ファティマさんは、ダリット運動の中での家父長制に対する取り組みの重要性について訴えた。また、ダリット男性の運動は男の問題だけで、女性の問題はあげないので、ジェンダーの問題に取り組むことの重要性をダリット女性自身が認識することも重要だと強調した。

対象が誰かによって運動のあり方を変えるのではなく、ダリットの女性の尊厳を侵したり、人権を侵害したりするようなものに対しては誰であろうと行動を起こしていくべきだ、と。

当事者に有効な法制度の実施を

アパルトヘイト廃止後、アフーマティブ・アクションの実施にあたって、ほかのカラードからの不平や不満、反対の動きが起きている。ほかのカラードの失業が増加しているからだ。常に機会向上の対象とされてきた南アの黒人女性が直面している新たな問題だ。

南アには DV 法もあるが、いくら素晴らしい憲法や法があっても、それは紙の上のことだけで、実施のための資源が与えられない。日本も DV 法や男女平等参画社会基本法が制定されたが、マイノリティ女性の視点が欠如している。女性差別撤廃条約を批准しても、男女平等のための法律を制定しても、アフーマティブ・アクションを作っても依然として差別は存在する。法制定に向けた取り組みだけでは

なく、草の根レベルでの教育やトレーニング、また、国レベルでの関係者に対する教育やトレーニングに関する政府への政策提言が重要だ。

こうした取り組みのプロセスがまさに教育であり、政治参加なのである。男性による政治・権力ゲームに振り回されず、どうやって社会全体に影響を与えるかという全体的な視点を持った運動を政治の場で女性が作っていくことが必要だろう。

「連帯」は可能か？

ファティマさんは、女性たちのダリット女性への無理解と自己中心的な運動を批判し、「他の女性たちを運動に巻き込もうとするときには、ダリット女性の問題をきちんと理解し、支援しようとしているかどうかということに気をつけ、批判的な視点を持っていなければならない。

ダリット女性の問題を解決するのに女性たちと連帯するには時間がかかる。今はそのときではない。まずはダリット女性のリーダーシップを強化し、それから他の女性運動とどう連帯できるか考えたい」と話した。

シバチャンドランさんもまた、「私たちは同じ時代に生きているのに、平和を堪能しているものもいれば、戦争に苦しんでいるものもいる。そんなことがあっていいのだろうか。連帯によって戦争をやめるよう政府にプレッシャーを与えたい」と真の連帯を求めた。

差別という普遍的な問題の中で、マイノリティ女性が直面する差別や暴力。私たちは、本当にその根底にある共通点を共有しているのか？また互いに異なる経験を共有できているのか？人種、階級、年齢・・・などをこえて、異なるグループの女性たちの連帯を国際的なレベルだけでなく、草の根レベルでどう作っていけるのか？

私たちは、異なった経験をもち、異なった経済状況にいることを認識しなければならない。南の女性たちと北の女性たちが掲げる優先事項は必ずしも同じではない。同じグループの女性たちの中でも階層があり、受ける差別や不利益の形態も違う。連帯といったときに、マイノリティ女性が被る差別の状況を犠牲者であるということだけでひとくくりにはできない。

それぞれが異なるニーズを持っていることを認識し、その異なるニーズに取り組んでいくためにどんな力が必要なのかを一人一人がみていき、身に付けていくことが必要だ。連帯が心の問題にすり替われ、それぞれが持っている「力」の不平等が見えなくなっている。

連帯するためには、誰かの力を犠牲にして力を持ってきたものがその力を奪われてきたものに自分の力を返したり与えていくことが必要だ。さもなければ、力を持ったものが力を持たないもののところへやってきて、ニーズの違いをあたかも理解しているかのごとくにふるまって、外から押し付けるだけになってしまう。

「連帯」を掲げながらも必ず、階級、ジェンダーという問題はつきまとう。その時々特定の共通課題を設定し、その部分で連帯できるもののみが連帯する。その際、何を最大限また最小限の獲得目標とするのかを考えなければならない。搾取や抑圧、また連帯について、決して一般化して議論することはできない。

「連帯」というあるべき大前提があるのではなく、連帯の構築に向けて努力をしていくこと、連帯を志向したプロセスの中で運動や戦略をともに練っていく努力をしていくことが大切なのだ。それぞれの経験を共有しながら、どんな差別がどんなふうに関連途上国と先進国のそれぞれのコミュニティに存在しているのかを見ていき、複合差別という切り口で、もっと広い視野での反差別運動のネットワークを作っていきたい。

男性の責任

マイノリティ女性への暴力が増加していることについての男性の責任に関する質問に男性参加者から、「人種主義と家父長制による人の世の冷たさを知っているマイノリティ女性こそがよりよい社会をいかに作っていくかを男性に伝えることができる」との意見や「教育を受けろ、強くあれ、より上位にいろ、と教えてきたり、特定の習慣を強要してきた文化や宗教、慣習や歴史を男性自身が考え、男性が男性を教育していく必要がある。

文化や慣習は地域によって異なるからこそ男性も女性差別的な文化や慣習を克服するための国際的なネットワークが必要だ」との意見も出された。

2005 年の「北京 + 10」に向けて

最後に、IMADR のニマルカ・フェルナンド理事長が、

- 1) 2005 年の「北京+10」に向けたマイノリティ女性当事者のネットワークづくり、
- 2) 国連、国際社会、国内、地域レベルでの政策提言、教育、ネットワーク、エンパワメントに関する戦略作り、
- 3) 各地でマイノリティ女性が受けている暴力についての情報ならびに意見交換をするためのメーリングリストづくり、
- 4) それぞれの国の法律や政策を見直し、よいものに関しては情報交換をしてそれぞれの地域の運動へと生かしていく、

ことなどを確認しあった。